

中世から近代美術・現代美術まで、キーワードは「時代の転換」

歴史の変化に呼応した美術 その1

今回も始めに、まず語句の意味合いとして「近代美術」と「現代美術」について触れておきます。何故なら、私たちが普段よく口にする言葉、「近代」と「現代」の違いも、実は極めて曖昧であり、解釈に幅があります。基本的に「近代美術」と「現代美術」は、学術的観点で見ると両方ともヨーロッパで発生した「美術動向」が、尺度となります。個人的には更に社会的変化を加味した見方が、自然であると考えています。

歴史学の観点で近代と現代を理解するための区分は、ヨーロッパ地域世界が他に進出する第一期グローバル期は16世紀、その第二期を18世紀後半、第三期を20世紀後半とします（参考、柴田三千雄『フランス史10講』）。これは社会の変化、社会の成熟と治世の完成度が重要なスケールとなっています。

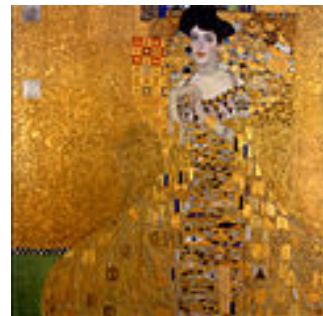
美術史における近代の解釈は、最も古い解釈はビザンチン帝国崩壊の中世以降、あるいは18Cのロココ様式以降、19Cの印象派以降などさまざまです。いずれも美術様式と、その進展に着目した区分発想です。他方、社会変化という観点で世界を振り返った時、中世から近代に移り変わる最大のファクターは、国家の在り方と民衆の立場の変化だと思えます。

つまり、王侯貴族の時代から資本家と労働者階級社会への構造変化、言い換えれば経済的発展により“絵画と画家の役割が、イコン（聖画像）からイディアとヴァリュー（理念と価値）の創出に置き換わった”と捉えると分かりやすいと思えます。この視点で整理すると近代美術とは、日本においても世界においても18～19Cの産業革命以降という考え方が自然です。ヨーロッパでは、印象派が登場しサロンで話題を提供した時代であり、そういう意味で「近代美術は印象派以降」と考えてよいと思えます。個人的にはイギリスで起こった、時期的には少し前のラファエル前派あたりから、少し後のフランスの抽象主義の自然派と一線を画する、“世紀末芸術”とも評される西洋美術の動向は興味深い流れです。技巧的にも、今日に繋がる色々な試みが成されています。

この時期の顔ぶれは、なかなか豪華であり、お互いに影響し合ったであろうと思えます。具体的に例を挙げると、美術関係ではジョン・エヴァレット・ミレイ、ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ、フェルナン・クノップス、オーブリー・ビアズリー、オディロン・ルドン、アンリ・

ド・トゥールーズ＝ロートレック、エドヴァルド・ムンク、グフタス・クリムト、ギュスターヴ・モロー、エドワード・バーン＝ジョーンズ、アルフォン・ミッシャ、エミール・ガレなど。

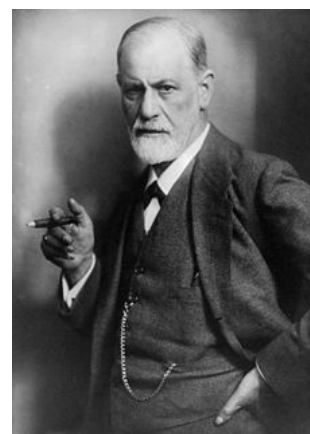
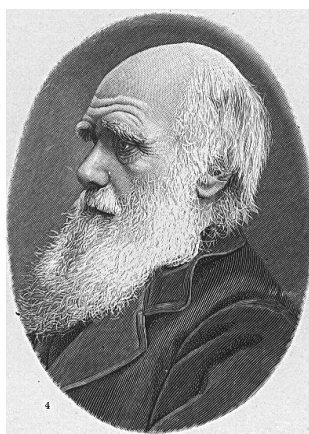
建築ではアントニ・ガウディー、オットー・ワーグナー、音楽ではグスタフ・マーラー、クロード・ドビッシー、文芸ではアルチュール・ランボー、オスカー・ワイルド、進化論のチャールズ・ダーウィン、思想家のフリードリヒ・ニーチェ、精神分析のジークムント・フロイトなどなど、まさに百花繚乱の時代であり、彼らの仕事やその存在そのものが、時代に影響を与えた“変化”の軌跡であり人類進化の原動です。



左から：ジョン・エヴァレット・ミレイ『オフィーリア』1852年

ギュスターヴ・モロー『オルフェウスの首を運ぶトラキアの娘』1865年

クリムト『アデーレ・ブロッホ＝パウアーの肖像 I』1907年



アンリ・ド・トゥールーズ＝ロートレック

チャールズ・ダーウィン

ジークムント・フロイト

他方ご存知の通り、日本は幕末の混乱と明治維新を経て西洋思想が浸透し、美術においては岡倉天心が中心的役割を担った『日本美術院』の奮闘などから、文化的側面の改革と発展を伺

い知ることができます。したがって、日本における近代美術は西洋美術と対峙する時期であり、同時に独自性を目指した「1898年の日本美術院設立以降」と考えられます。日本美術院設立時の主なメンバーは、岡倉天心、橋本雅邦、六角紫水、横山大観、下村観山、菱田春草、寺崎広業、小堀鞆音、西郷弧月などでした。

初期の美術院では、特に大観や春草等が天心の指導のもと“朦朧体”という、それまでの日本絵画の特徴であった輪郭線を省き、陰影で表現する手法の探求に臨み、近代美術の嚆矢となります。当初は日本画が中心のカテゴリーでしたが、後の1896年に黒田清輝を中心とした西洋画科が設置されています。

日本美術院設立を導くことになる1887年東京府に設立された『日本美術学校』も重要な要因ですが、広い意味で日本美術界の飛躍をもたらすまで苗代の役割だったと思います。約20年を経て、例えるなら美術院は「芸術“追求の徒党”のエネルギー」そのものとして躍動し、美術学校は「芸術家育成」の聖地を目指した」と言えるでしょう。

従って、私は日本に近代芸術をもたらした契機として、日本美術院設立を重視しています。但し、現在の『院展』に見て取れるように、1920以降は日本画がその活動の中心となり“追求のエネルギー”は他の団体に分散していくことになります。これも時代の趨勢、自然の成り行きだったのでしょう。

美術学校が設立される2年前の1885年、伊藤博文が初代内閣総理大臣に就任し、さらに2年後1889年に“大日本帝国憲法”を發布しています。日本における近代美術を考える時、“明治維新”がなければいふんと違った歩みになったと思います。

実は美術学校が設立される9年前の1876年(明治9年)に、『工部美術学校』が設立され1883年まで運営されていました。これは明治日本における殖産興業の発展を願い設置された省庁、工部省のもと近代日本の工業発展や人材育成を目的とし設立された学校のひとつです。西洋美術のみの教育機関で、「画学科」「彫刻科」の二科があり約60名ほどの人材を輩出したそうです。

その設立の契機は、1871年の岩倉使節団にあります。使節団は岩倉具視を全権大使と仰ぎ、木戸孝之、大久保利通、伊藤博文、山口尚芳ら総勢45名がアメリカ、イギリス、フランス、ドイツと巡っています。

この時、木戸は一行と帰路を別にし、途中ローマを訪れます。ここで西洋文明の源ともいえる遺跡群等にふれ感銘を受け、後日伊藤にその感動をしたためます。その後伊藤もローマを訪れ、ローマ文明の集積を目にし、同様に驚嘆します。二人は西欧文明の表面的なことだけでなく、脈々と続く文明の源流に畏敬の念を覚えたのでしょう。それがイタリア人教師を招聘し、

イタリア美術を学ぶ、工部美術学校設立に繋がったわけです。日本における油画も、この時さまざまな影響を受けつつ、羽化しています。この油画については別途、述べたいと思います。

世紀末、日本の美術界に影響を与えたヨーロッパ絵画、皮肉にも大衆芸術として存続していた“浮世絵”に脚光を浴びせ、その芸術性を高く評価したのは主にヨーロッパの“印象派”の画家達と言われています。私もその独創性や技量から“葛飾北斎”や“歌川広重”などの絵師は、世界に誇れる芸術家だと思っています。

また、日本人は仕組みを構築することにも長けていました。例えば「浮世絵」は18C後半に絵師と彫師、摺師、彼らを束ねる版元が、現代のマス媒体に相似した“消費と供給”の合理的な関係式を成立させていました。また、時代は遡りますが品質の追及という意味では、狩野派を源流とする御用絵師“お抱え絵師とその制作集団”の工房も稀有な存在でした。工房形式は中世のヨーロッパにも存在しますが、日本ほど精緻な組織ではなかったようです。もっとも、都市国家を基準として発展するヨーロッパ治世・文化とその関係を考慮する必要があり、単純に比較はできません。

御用絵師は、1872年の廃藩置県とともに姿を消していくこととなりますが、浮世絵の技術は現在も木版画に生き、研究所や工房としても継承されています。

余談ですが日本美術院創設メンバーの橋本雅邦は、狩野派の一門の家系であり幼少期から絵の手ほどきを受けていたそうです。結果的に日本画の伝統は、日本美術院や東京美術学校に継承されます。



菱田春草 『夕の森』1904年



葛飾北斎 『富嶽三十六景』「神奈川沖浪裏」

*画像は、ウィキペディアなどの公開サイトより